琉球大学学術リポジトリ

〈いたづらなる〉ものを身に付けるための「共通教育」

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学大学教育センター
	公開日: 2018-07-17
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 萩野, 敦子, Hagino, Atsuko
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/42011

〈いたづらなる〉ものを身に付けるための「共通教育」

教育学部　　萩　野　敦　子

> 人の才能は、文（ふみ）あきらかにして、聖の教へを知れるを第一とす。次には手書くこと、むねとすることはなくとも、これを習ふべし。学問に便りあらんためなり。
>
> 次に医術を習ふべし。身を養ひ、人を助け、忠孝のつとめも、医にあらずはあるべからず。次に、弓射、馬に乗ること、六芸（りくげい）に出だせり。必ずこれをうかがふべし。
>
> 文・武・医の道、誠に、欠けてはあるべからず。これを学ばんをば、いたづらなる人と言ふべからず。

この文章は、兼好法師によって著された随筆文学の白眉『徒然草』の、第122段の前半部分である。原文でもある程度の意は伝わるであろうが、現代語訳を付しておこう。

> 人間の才能は、書物・文章に精通していて、聖人の教えを知っていることが、第一の条件である。次には文字を書くことで、それを専門にするということはなくても、書道は習っておきたい。文字を書くことによって、学問につながるはずだからである。
>
> 次に医術を習うのがよい。我が身を養生し、他人を助け、忠孝につとめるうえでも、医術を知らないことには果たせないものだ。
>
> 次に、弓を射て馬に乗ること、これらは六芸（中国周代における士たる者の必修科目）にも登場する。必ずこれをたしなむがよい。
>
> 文・武・医の道は、まことに、どれ一つ欠かしたくないものである。これらを学ぶ人のことを、無用なものにかかずらう暇な人間と言うべきではない。

鎌倉時代最末期成立の『徒然草』に記された兼好のメッセージの論理性や鋭さには、現代人ですらしばしばはっとさせられる。この文章に初めて接したのがいつであったかもはや記憶にないが、このたび「共通教育への期待」というテーマで本誌に寄稿を依頼された折にふと思い浮かんだのが、この文章であった。

＊　　＊　　＊

1980年代、私は某国立大学の「文Ⅰ系」に入学した。その後一年半にわたる「教養部」の学生としての日々は、当時の私には、憧れの大学への合格を目指して受験勉強に勤しんできた自分に与えられた休息時間のような気がしたものである。もともと勉強が好きというよりは、きれいにノートを取って勉強した気になることが好きな（いかにも女子学生にいそうな）タイプだったこともあり、持ち込み可の試験やレポートによる評価は悪くなく、二年後期には第一志望の国語国文学専攻課程（通称国文）に移行できた。あとから考えれば、国文に進むことを意識して教養部時代に下準備でもしておけばよかったのだが、授業には出席するものの自ら探究することもなく、アルバイトをしたり友人と遊んだりしながらの、のほほんとした一年半だった。国文で専門教育を受けるようになってはじめて「学問」をしていると自覚でき、「教養部ってなんだったんだ？無駄な（まさにいたづらなる）一年半だったなあ」と思ったものである。

その後、大学教育に大きな変革の波が押し寄せ、恐らくかねてよりその存在意義に「？」マークが貼られていたであろう教養部は、解体した。しかしその時点で博士課程の大学院生だった私は、皮肉なことにそれによってはじめて教養部の存在意義というものを、肯定的に捉え直したのである。

というのは、年齢の離れた後輩たちが、日本文化論講座（変革の波は、私の出身・国語国文学専攻課程の名前も変えてしまった）のゼミや研究会等で発表・発言するのを聞いていて、なんとなく

「薄っぺらさ」を感じるようになったのである。私自身決して学究的な学生でも多趣味な学生でもなかったが、少なくとも同世代の先輩同輩後輩は、もう少し「奥行き」を感じさせる思考ができ、話す内容にも面白みがあったように思った。

それは、大学院生のかたわら非常勤講師として勤めていた幾つかの近隣私立大学の学生たちにも言えることだった。「彼らにはどうしてこんなにも厚みがないのだろう？」——そのとき私なりに出した答えは、「彼らには〈いたづらなる〉部分がなさすぎる」、というものであった。

＊　＊　＊

さて、『徒然草』を著した兼好法師は本来、エッセイストではなく歌詠みである。当代において和歌四天王の一人と呼ばれるほどの名手であった。そんな彼が「文」あるいは「書」の必要性を感じるのは当然のこととしても、「武」や「医」となると、どれほど必要に迫られていただろうか。「武」はめったに行わなかったであろうし、「医」はそれこそ医者すなわち「医」の専門家に任せておけばよかったはずである。

「文・武・医」にはそれぞれ専門家が存在する。しかし、たとえ「文」の専門家であっても「武・医」を心得たい、「武」の専門家であっても「文・医」を心得たい、そして「医」の専門家であっても「文・武」を心得たい、というのが兼好の主張である。彼がことさらに「言ふべからず」と釘を刺しているところからすると、「文」の専門家でありながら「武・医」にまで手を出す者は、〈いたづらなる人〉と冷笑されるのが常だったのであろう。第122段は、その常に反駁した兼好の、「〈いたづらなる〉ことのススメ」にほかならない。

〈いたづらなり〉という古語は、「当然の期待に反して、無為・無用で、何の役にも立たないことが原義」（岩波古語辞典）とされ、「暇だ」「役に立たない」「無意味だ」「無駄だ」「無用だ」といった現代語に相当する。「文学者が医学を学んでも、無意味でしょう？」「それがいったい将来なんの役に立つの？なんの役にも立たないでしょう？」——兼好が生きた時代にあった〈いたづらなる〉ことへの批判は、現代における大学の教養部が貼り付けられたイメージにも、通底するものだったのである。

言うまでもないが、〈いたづらなる〉ことと「ゆとり」の名のもとに知識・知恵を空洞化させることとは、決して同じではない。兼好が求めるのは、一見〈いたづらなる〉ものに見える知識・知恵を身に付けることによる、人間＝生活者としての力強さ・奥の深さ・厚み、なのである。

＊　＊　＊

教養部は解体した（私が知るのはあくまでも母校のそれにすぎない）が、教養教育は「共通教育」という名で残った。「共通教育」は、本学においては軽視されることなく、むしろ本学が特色ある大学として在り続けるうえでの鍵とも位置づけられているようである。たとえば、私自身は教育学部における専門科目を通して、中学校ないし高等学校の国語教員を目指す学生に対して「（ヤマトの）古典」に関する知識を身に付けさせることを最も大きな役割としているが、共通教育では「琉球の古典」を学ぶ場が提供されている。もしも沖縄県の教員を目指す学生がそれを学んでくれたならば、彼・彼女が将来教員になったときの厚みとなるであろう。ヤマトの古典と琉球の古典とを見比べて、その差異や共通性に思いを致すことができれば、国語教員としての目に見えぬ奥行きを身に付けることも可能であろう。

いま述べたのは「文」が「文」を身に付ける例になってしまうが、「文」にとっての「武」や「医」（さらに「法」「理」「工」「農」等々）も、やはり同様の意義を担っていると思う。〈いたづらなる〉もの（それは結局のところ「無駄」でも「無用」でもない）を提供する「共通教育」を今後も、学生たちが専門教育では身に付けられないものを補ってくれる場として、また人間＝生活者として一回り大きく成長できる場として、大いに頼みとしたい。